令和３年２月 19 日（金）　第１回富山県成長戦略会議　議事要旨

＜開催概要＞

１　開催日時　　令和３年２月 19 日（金）15：00～17：00

２　開催場所　　富山県庁４階大会議室

３　出席者（五十音順）

高木　新平	株式会社ニューピース代表取締役社長
土肥　恵里奈	株式会社ママスキー代表
中尾　哲雄	富山経済同友会特別顧問、株式会社アイザック相談役
中村　利江	株式会社出前館エグゼクティブアドバイザー
藤井　宏一郎	マカイラ株式会社代表取締役ＣＥＯ
前田　大介	前田薬品工業株式会社代表取締役社長
藻谷　浩介	株式会社日本総合研究所主席研究員
吉田　守一	日本政策投資銀行富山事務所所長

＜議事次第＞

１　開会

２　議事

①　基調報告

②　意見交換

３　閉会

１ 開会

本日、第１回の富山県成長戦略会議を開催したところ、委員の皆様には快く御就任を御了承いただいた。また、万障繰り合わせて御出席いただいたこと、心からお礼を申し上げる。

11月９日に富山県知事に就任してから100日余りがたった。この間、常に新型コロナウイルスの感染拡大防止をどうやっていくのか、それと社会経済活動をどうやって回していくのか、このジレンマの中でぎりぎりの対応をしてきた100日余りだった。

北陸新幹線の敦賀までの工事が大幅に遅れてしまうという課題も降ってきて、これについても政府への緊急要望などに奔走したところ。大雪や地滑りなどの自然災害への対応もあった。また、もう一つの感染症として、高病原性鳥インフルエンザも小矢部市で発生するという事態もあった。幸い、今日から富山県でも医療従事者への新型コロナウイルスワクチンの先行接種が始まる。少し明るい兆しが見えてきたところ。高病原性鳥インフルエンザの終息宣言も今朝行った。

解決すべき問題にしっかりと対応しながらも、やはり今の子供たちの未来のために富山県の新しいビジョンを描いていく、このような仕事ももちろん大きな務めだと心得ている。

そんな中、昨日、私としては初めてとなる令和３年度の当初予算、約6,335億円に上ったが、この案の発表までこぎ着けることができた。

そして、今日、成長戦略会議の１回目を開催することとなった。この会議は、私が県民の皆さんにお約束をした大切な政策の一つ。富山県を新たなステージに上げていくために、皆さんと共に自由闊達な議論をしていく、私自身とてもわくわくしているところ。

若者からお年寄りまで、笑顔と希望にあふれた富山県となるように、チャンスがあり、夢をかなえられる富山県になるように、そして、何よりもわくわくすることがたくさんある富山県に、そんな富山県を実現していくべく、どうか皆さんの自由闊達な議論、時には突き抜けるような議論もお願いし、冒頭、知事としての御挨拶とさせていただく。

２－① 基調報告

【藻谷委員】講演資料に基づき説明。

- コロナ禍はファクトファインディングの教科書。日本全体の数字ばかりに注目しがちだが、全国の合計や平均は東京の状況に影響されやすく、富山県に当てはまるとは限らない。地方自治の世界では、事実を全国一元ではない部分まで、きちんと確認しなくてはならない。
- 新型コロナの毎日の新規陽性判明者数（７日間移動平均）を全世界の合計でみると、昨年秋以降で増加傾向にあったが、１月８日をピークに減り始めている。ちなみに日本でも、米国でも、欧州でも、多くの国で同じ日がピーク。感染から発症には２週間のタイムラグがあるので、１月８日から２週間前のクリスマスイブに感染した人が世界的に多かったということ。ウイルスは、緊急事態宣言やロックダウンといった国ごとの事情に関係なく、世界共通の大きなサイクルで消長している部分がある。
- ただし感染の深刻度は国ごとに全く違う。イスラエルやアメリカはワクチン接種で先行しているが、日々の新規陽性判明者数の水準（人口100万人あたりの数字）は、未だに日本の数十倍もある。ワクチンに期待がかかるとはいえ、これらの国々で接種が進むと日本の今の水準以下に新規感染が下がるかは未知数だ。
- 同じ日本国内でも地域によって感染状況に著しい差があることは、なんとなく知っていたり聞いたりしていると思うが、毎日、東京の新規陽性判明者数のニュースを見ているとついついそちらに影響されてしまう。陽性判明者数の累計が圧倒的に多いのが東京の都心の23区で、全国の４分の１が集中する。同じ都内でも多摩の市町村や、隣県の埼玉、千葉、神奈川はずっと少ない。東京都心に比べれば、富山にはほとんど感染者がいないくらい―いないというのは失礼だが、相対的にはそのくらいの差がある。新潟県や、山陰の島根、鳥取はもっと少ない。
- 東京は人口が多いので、感染者が多いのは当たり前にも思える。しかし陽性判明者数累計を人口100万人当たりでみても、地域間格差は著しく大きい。例えば新潟と東京では30倍違う。人口当たりに直してみれば、陽性判明者は東京都、大阪市、福岡市、札幌市、沖縄県で突出して高く、中洲やすすきのといった盛り場の存在が大きいことが推測できる。大きな飲み屋街を持つ金沢のある石川県と、富山県にも顕著な差がある。
- これだけ地域ごとの偏在が明確な新型コロナウイルスに対処するには、地域の自主性を上げて、都道府県単位に予算等を使ってもらう方が明らかに効率がいい。東京都心

と富山が同じ対策をしているのでは、お金の使い方があまりにもったいない。

- 島根県知事の、島根県内だけでのGoToを行いたいという主張は認められなかったが、未だに死者の出ていない、台湾よりも安全な島根県内限定であれば、明らかにやって大丈夫。島根と鳥取限定、あるいは北陸３県や新潟を加えても大丈夫だと思われる。GoToなどは国単位の事業なのでなかなか難しいのかもしれないが、コロナを契機としてもう少し地方分権、地域主権的な仕組みを取り入れる必要がある。地域間逆格差の大きいコロナ禍に、我々は教えられているのではないか。
- 富山について再度申し上げると、様子を見つつではあるが、県内限定での集客交流を含め、経済活動をできる範囲で拡大していっても今のところ問題がない。それで感染が再拡大するようならまた引き締めるということの繰り返しを適度にやる必要がある。東京に合わせて、ずっと引きこもって自粛する必要はない。
- 日本での問題は“医療崩壊”、つまり新型コロナに対応した病床の過不足だ。しかしそれは全国平均の話で、都道府県別に見れば状況はまるで違う。コロナ対策済の病床数を、人口100万人当たりに換算すると、県によって４倍以上の差がある。国内ベストファイブは鳥取、山口、大分、群馬、そして富山だ。「インフラの富山、準備の富山、真面目な富山」というのがここでもやはり発揮されている。今の富山県は、あまりコロナ患者がいないが病床は用意してある状態。東京などは全国平均より病床数はあるものの、患者が多い。千葉は病床も少ないし患者も多いので厳しい。
- いろんな先生やマスコミ、ブロガーが、日本国としてのコロナ患者の病院受け入れ体制や制度について論じているが、富山は、同じ日本の制度下で、きちんと公立病院と民間病院ですみ分けをして、公立病院で患者を受け入れるという対応ができている。いい機会なので、そういうことを富山の人はもう少し自慢したほうがいい。特に、東京で感染の恐怖におびえている富山出身のお年寄りなどは、秋口ぐらいに富山に移ってきていれば全然心配しなくてよかった。こういったことは、東京からは全国一元のニュースしか出てこないので、もっとみんなが理解して発信する必要がある。
- 明らかに東京は、どう頑張っても人口密度が高すぎて患者は多めになるし、病床を増やせといってもなかなか増やせない。いろんな意味で不利。感染者の多い東京をGoToから除外すれば、そこまで日本中にコロナウイルスは蔓延しなかった。
- それではこのような状況は、東京への一極集中を変えるのだろうか。都心のオフィスに関して言えば、テレワークを進める中で、大企業であれば社員の２、３割は出勤し

なくていいということが判明した。ということで今後はその分だけは、都心でオフィスの余剰が生じ、起こり、賃料が下がってくる。しかしそれに応じて社員の地方分散が進むわけではなく、多くは通勤可能な範囲にとどまるだろう。

- 住宅に関しては、テレワークを活かして郊外に行こうという人もいる一方、都心にオフィスが減ってマンションが増えるため、この際都心に住もうかという逆張りする人が結構多く、２つの流れが生じている。そんな中で、地方移住のニーズも増えてはいるが、数としては少ない。一般論として２：６：２の原則というものがあるが、それに則っていえば、何の痛みも感じずに東京で通勤を続ける人が２割、嫌だと思いながら続ける人が６割、脱出したい、１週間に１日でもいいから地方に住みたいという人は２割ぐらいというのが、相場観だろう。その上で、実際に本当に動く人は２％いれば大したものだ。マーケティングの世界ではこの２％をパイオニア層と呼ぶ。
- しかし、少数だからといって意味がないわけではない。移住の戦国時代とは、まずはこの２％を受け入れる争いだ。天下を取るには、付和雷同するその他大勢よりも、人に先んじる２％が大事である。首都圏3,500万人の２％は70万人。京阪神1,500万人の２％は30万、この２つだけで100万人。100万人すべて来る必要はもちろんなく、その中の100人が富山に仕事を持ってくるだけでも県内の景色は変わる。
- 社会人について言えば、現職に満足な人は当然動かないが、UIターンを伴う転職は絶対増える。そしてもっと注目なのは、この春に東京に進学、就職する若者が以前よりどのぐらい減るか。今年の春に若者がどれだけ動くか、年度替わりにどれぐらいUターンしてくるか、この２つの数字次第で、昨年以来の小さな動きは全部吹っ飛ぶ。
- 恐らく今、人手不足の富山の企業は、Uターン就職のリクルートをされていると思う。東京に行った大学生で、最後の年がリモートになった人を呼び戻す、すごく大きなチャンス。まさにこの春が勝負。ぜひ取り組んでほしい。
- ちなみにこれまでも、富山県へのUIターンは決して少なくはなかった。2015年と20年の富山県の住民票の数字を比較して、子育て世代回帰指数を計算してみると、95となる。この数字は、今現在の県内に０～４歳が100人いたとして、進学・就職・UIターンを経て35年後の県内では何人になっているのかを、今の出入りのトレンドが継続するとして試算するもの。つまり今のトレンドが今後35年間続くとするなら、今の０～４歳100人が、35年後には35～39歳になって95人いる計算。つまり一度出ていった分は相当程度戻ってきて、あまり減らないということだ。

- この指数を比べれば、富山県は地方の中では、宮城県、石川県、広島県、沖縄県などと並んで優秀な方だ。やっぱり仕事や産業があるし、家も広いし、生活保護率は低い。しかし100を切っているということはやっぱりじり貧だということ。「地方の中ではまし」というレベルで威張っているだけでは駄目。そもそも日本全体でも、15～20年の５年間はこの数字はかなりのプラスだった。インバウンド対応の仕事を得て、日本を気に入って住みつく外国人の若者が結構いたのである。もう少し頑張って、プラスマイナスゼロにまでは持っていってほしい。
- そのために、いかにしてさらにUIターンを促進するか。仕事はある。給与は東京より低くとも、先日の日経新聞の発表にもあったとおり、実際の可処分所得はむしろ高い。居住環境が良いのは誰でも知っている。教育環境についても公教育が充実しており、子どもに無理に下駄をはかせてお受験エリートを目指すような人を除けば、富山に問題は感じない。
- だが富山県の公教育の問題はむしろ、都会に進学させるお受験ばかり志向しており、特色ある国際教育とか、特色ある地域教育が目立たないところにある。これに対してたとえば島根県では、地域教育をしっかりやっていて、自分の地域の課題を自分で見つけて取り組む課題解決型授業でも先進だ。これは企業に入った後、直接役に立つノウハウで、大学でも推薦入学の選考の際には大きな加点要因になっている。
- 交通は、車は至便、歩く暮らしは、富山市などは頑張っているけれどもまだまだ不便。遊びや自然は最高、町は寂しい。車社会の富山だが、「今日はわざと公共交通で通勤して、飲んで帰る」といったイベントをもっと増やすべきだろう。富山の人はできていないことに文句を言いがちだが、良さをさらに伸ばして自慢するべきだし、弱点克服のプロセスをこそ売りにすべき。克服ストーリーの方が感動を呼ぶ。地元民がよさを楽しんで、そして弱点克服を楽しくやっているというニュースがもっと出てきていい。
- 気候は、誰でも御存じのとおり、富山の冬は陰鬱、夏秋は爽やか。しかし、富山の冬の晴れ間の美しさというのは、東京にはない。これだけ冬の晴れ間がきれいなのは、旭川と山梨と富山ぐらいだと思う。すっと晴れたときの神々しさの、今しか見られない一瞬、最後のチャンスかもしれないぐらいすばらしい景色が一瞬現れるのを、見ることができるのは住んでいる人だけ。その瞬間を県内の人がSNSでバンバン発信するとか、随時ライブカメラとかで中継するなどしてアピールしてほしい。冬の間ずっと同じ天気の東京にはできないことだ。

- 最近、燕三条のスノーピークさんが主導して「野遊び」ということをやっている。富山でも、学校でのスキー教育といった厳しいものではなく、もっと面白くて新しい野遊び、いろんなニュースポーツ含め、富山でしかできない冬の遊びを楽しむことを、教育課程に取り入れるべきだ。そういうことをやらず、家の中で勉強とゲームばかりしているから、東京に進学・就職しても帰ってきたいと思わないままなのである。
- 今の若い人は、昔のように寄らば大樹の陰で動いていない。正確には、多くの人はまだ寄らば大樹の陰で動いているが、優秀な人間ほど寄らば大樹の陰で動かなくなってきている。プロ野球でいえば、田中将大投手は大阪出身で北海道の高校に行って、仙台の選手になって、そしてニューヨークに行き、また仙台に戻ってきた。ジャイアンツにも東京にも行っていない。大谷翔平も岩手県で育ち、札幌で選手になってアメリカに行きで、東京には住んだことがない。
- バスケの八村塁選手も、富山から世界に出た。一級は地方から世界に出て、田舎と世界をグローカルに往復する時代。ビジネスパーソンや芸術家も今後は同じだ。八村塁選手がまた富山に戻る時代になれるか。「マー君型のライフスタイル」の受け皿になれるよう、ぜひ富山の人は考えてほしい。「優秀な人ほど、地方と世界、ハワイと富山を行ったり来たりできるし、そのほうが東京にずっといるよりはるかに楽しい」というようなワクワク感を、県内の若者にも感じてもらいたい。
- 富山はノーベル賞を取る人も多く、スポーツ選手も一流が次々出てきている中で、東京に行きっぱなしばかりにしないことが可能なはず。富山といえばあの人だねというロールモデルを、若手の中からきちんと育てていくべきだ。そんなことの延長上に、必ず県民の意識に大きな変化が起きる。山はきれいで、おいしくて、そして冬は本当に嫌でも、２時間で晴れた東京に行ける。住むのはこちらで良いと。
- コロナ禍は、時代の大きな変わり目の最初の曲がり角みたいなもの。これを機に富山のよさを伸ばしていくべき。移住を希望するたったの２％を受け入れるぞというところから、最初はぜひスタートをしていただきたい。

【前田委員】講演資料に基づき説明。

- 本気でこの地方都市・富山から世界にインパクトを与えるような取組をしようということで今頑張っている。
- 前田薬品では、医薬品、一部化粧品の企画、製造、販売を行っており、その中でも、外用剤（塗り薬、貼り薬）に特化しており、外用剤は医薬品市場の４％という非常にニッチな分野で、特徴のある製品やサービスをつくろうと展開している。薬の治療分野は、皮膚にまつわるありとあらゆる疾患領域にアプローチしている。
- 20年学び、40年働き、20年休む、というのは昭和、平成の平均的なモデルだったと思うが、最近、学生のベンチャーの方や、60、70過ぎて起業している方と一緒に仕事をすると、これが80年、90年働くのが当たり前の時代になってきたと感じる。これを働かされる時代だと思うか、働けると思うかで人生は大きく変わる。
- 人生100年時代というのは、単に100年、長らく寿命が続くという時代ではなく、80年、90年、元気に社会とつながりながら働けるかどうかが試される時代。日本はそこについての世界のモデルになる可能性を秘めていると信じている。
- 日本の2018年、2016年のデータによると、平均寿命は男性81歳、女性87歳だが、心身ともに健康だと感じられるリミット（健康寿命）は72歳、74歳。長く生きても人生の10％以上は何か不調を感じて生きている。長く生きても10分の1が非常に苦しい状態だともったいないので、製薬会社としてこの点に着目している。
- 日本の人口は明治25年くらいで5,000万人を超え、約70年経過して2004年でピークに達し、今からまた70年ほどかけて減っていく、よほどの移民政策等々を講じない限り、こういった人口になっていくことは目に見えており、こうした日本のマーケットにおいて、富山の製薬会社も含め社会全体が１つ大きなモデルチェンジをしなきゃいけない。
- 前田薬品も、従来の日本の潤沢な税金収入に基づいて社会保障財源がある前提で成り立つビジネスモデルから脱却し、予防、もしくは治療した後にまた治療する領域に戻らないようなアフターケアをしっかりしていくようなモノ・コトをつくれる会社に生まれ変わろうと進めてきている。
- 我々の今までの事業フィールドは、患者に対し、医薬品という商品を使って治療するということが既存のビジネスだった。しかし、みんなできれば健康であり、もっとレジャーや自分の趣味にお金を使いたい、健康でありたいと思っている。そのため、前

田薬品の今のビジネスモデルは、治療のほか、予防・保健、健康、美容（アンチエイジング含）を目的とし、商品だけでなく、サービス、施設、教育や啓蒙も含めてマーケットを広げる形に変化してきており、これからの50年、100年を見据えて、単に治療のためのものづくりの企業から、健康寿命を延伸するようなコンテンツをつくるような企業に転換しようということで、大きく事業モデルのかじを切っている。

- 今、約30から40ぐらいの製薬以外の事業、新規事業、新会社をドライブしているが、そのうちの大きな１つがヘルジアン・ウッドという村づくり。我々ヘルジアンのチームの共通する思いは、予想外に込みあげる「美しい村」をつくろう、世界一美しい村をつくろうというのが我々の意気込み。
- 世界一美しい村のベンチマークとして、イタリアにアルベルゴ・ディフーゾという村全体をホテルと称する、とても美しいイタリアの村があり、そこが１つのモデルになっている。体と心の健康に加え、WHOの健康の定義にもあるが、地域・社会――絆と言えるような――の豊かさ、健やかさがあるかによって、体、心に響くことが確実にあると研究で明らかになっている。
- 富山県がコロナ禍で自殺者の増加率が全国でワーストワンになったというニュースがあったが、何かしらの地域・社会、絆の分断というのは、地方、日本全体にはびこっている問題かと思う。体、心・脳、地域・社会、絆の健康のバランスがすごくうまく取れた、そういった村をつくりたい。
- 日本で最多種・最大級のハーブの桃源郷をつくって、そこに富山の自然・食・人・文化・工芸、本当にすばらしい人や食やクラフトマンがいる。現在、土を耕し、ハーブを育て、アロマオイルを抽出したり、食に使ったり化粧品の原料にしたりして、日本のハーブを今度は世界に、アロマ大国、ヨーロッパに売っていくというコンテンツも行っている。
- ４，５年前にヘルジアン・ウッドのプロジェクトのプレスリリースをした際、富山の製薬会社がリゾートに進出するのではなくて、新しい形のビレッジ、村・集落を作ると報道してほしいとお願いした。村づくりに主眼を置いている。
- ヘルジアン・ウッドのプロジェクトの実施場所は、限界集落であり、今、12世帯27人の人しか住んでいない。２年前に隣接する小学校が休校になり、３年前には保育所が休所になった。
- 昨日、立山町から近くのヘルジアン・ウッドのそばにある学校の利活用の公募が出た。

東京、富山の面白い企業集団と僕たちが新しい国際的な学校をつくるという公募を出していきたい。富山にしかできないインターナショナルスクールをつくりたい。

- 地域の方々にこの土地を譲ってほしいというときに、最初にこの言葉を見せてプレゼンをした。「みなさんの日常の生活や日常の風景は世界に誇れる残すべき財産である」と。限界集落であり、平均65～70歳くらいのおじいちゃん、おばあちゃんたちからすると、僕の言葉は本当に不思議というか、訳が分からなかったみたいで、頭の上に、はてなマークがぽんぽんぽんと並んでいた。
- 地方創生、イノベーション（革新）をやっているつもりではないが、もしこの切り口で話をするのであれば、地方創生やイノベーションには、よくよそ者、若者、ばか者が必要だと言われるが、やはり何をもっても本物がこれから必要だと思う。本物とは何か、自分自身でも今探っている途中だが、現時点での僕なりの本物の定義は、本質を見極めて本気で取り組み、最後までやり切れる人、人が紡ぐ物や事やコミュニティーには、何か本物を感じる。富山にもたくさんの本物があるなと感じる。
- 幾つもの新規事業や、ヘルジアン・ウッドもそうだが、事業の成功、人生・地域の幸せといったときに、６つのいわゆるパラメーターをもって、これが成り立っているかどうかということを判断材料にしている。
- まず、自分自身が本当にやりたいかどうか、やらされるじゃないかどうか。それから、やれるかどうか、これは未来進行形。うちの社員も、30、40代で、「この学校に行ってこの仕事しかしていないから、社長、こんな仕事は僕にはできません」と言うが、人生100年時代、まだ折り返し地点にもなってないのに、30年、40年の今までやってきたことだけで自分の能力を語るのはもったいないと思う。常に未来進行形で自分の能力を捉えてほしい。
- そして、移り変わりが早い時代だが、今このとき、この地域、このコミュニティーで本当にやるべきかどうかということを真剣に考える。やりたいことについては、いわゆる利他精神、想いの純度。やれることについては、やりたい、やれるだけではなくて、そこに戦略戦術、ブランディングやマーケも含めて伴っているかという確度。難しいのは、やるべきこと、世界や歴史的な今までの流れを踏まえて、今やるべきことなのか、そこでやるべきなのかという洞察の深度。この６つについて様々なチームの意見を聞いて、今日の成長戦略会議もまさにそうだと思うが、たくさんの意見の衆知を集めてこの洞察をしていくということを大切にしている。

- 「過疎化」という言葉は全国どこにでもあるが、今、東京のクリエーターとかデザインをやる人や、広告代理店、その他大企業のクリエーティブチームと話すと、過疎化の一文字を変えて、「開疎化」、しかも新しい目線や新しい世代によって開かれていくということが本当によく使われる。過疎化というと非常に寂しいイメージがあったが、開疎化と言われた瞬間にとても明るい未来が見えてくる。ヘルジアン・ウッドもそこの開疎化の一つとして、いい形で村づくりをしていきたい。
- 本当に美しい景色が広がるヘルジアン・ウッドは去年の３月にオープンした。東京のシェフがやりたくても絶対できないことがヘルジアン・ウッドではできる。ヘルジアン・ウッドのシェフは、滋賀県長浜から移住してきた。目の前の田んぼで取れたお米や、隣で取れたハーブや野菜、これを取った瞬間に調理できる、この幸せをかみしめて、料理を作っている。
- ヘルジアン・ウッドのハーブ畑には、去年６月末、たくさんの若い人たちが朝４時、５時から、ラベンダーを刈りに来たりして、近くのアロマオイルの抽出工房で精油を抽出してアロマオイルを持っていきたいということで、１か月ぐらいで四、五百人の人が毎朝、来られた。
- 面白かったのは、高岡からぴっかぴかのハイヒールとすごくきれいなジャケパンを履いてやってきた人が、泥だらけになることも厭わず、畑の中に入っていって、朝５時からラベンダーを刈り取って、７時ぐらいに高岡のオフィスに戻ると。「ボスにこのラベンダーの花束をプレゼントするんだ」と言って帰っていった。コロナ禍だが、本当に幸せな時空があった。
- 2018年にハーブガーデン、水田、畑を開墾し、去年の３月にレストラン、そして７月にアロマ工房、そして10月にはイベント広場をつくってきた。新国立競技場をつくった隈研吾さんとタッグを組み、全ての建築デザインを行っていただいた。第１期、東京ドーム約１個分の3.7ヘクタールの土地を買い、レストラン、アロマオイルの抽出工房、イベント広場をつくった。
- アロマ工房では精油の抽出見学ができる。日本の740社ある製薬会社でアロマオイルの抽出をしているのは前田薬品のみ。ヨーロッパへ行けば医薬品となっているような精油の抽出を見学や体験ができる。その他、ワークショップやセミナー、野菜のマルシェや地元の陶芸家さんの個展、芝刈り体験、ウエディングなどもやったりした。
- これからまだこの村は広がり、2021、22年に向けて、今度はエステ、トリートメント

スパ、東京のチームと組んで新しい会社をつくってサウナのホテル、地域の方と旅人が交ざり合うような公民館のようなホテル、ヴィラ２棟をまた隈さんとタッグを組んでつくる計画である。

- 隈さんと僕たちがやっているのは、増築ではなく、村づくりするように展開していくということ。これまでは単独でやってきたが、この村を見て自分たちもチャレンジしたいという若者や、パン屋をやりたい、美容室をやりたい、図書館を開きたいという方たち県外、海外からも快く受け入れて一緒にやっていこうということで村をつくっていく。
- サウナホテル「The　Hive」というホテルで、半地下、半地上。人間はふだん大体地上しか見ていないが、地下の地層とかをまじまじと見たことがない。このハーブとか野菜がどんな根っこをしていて、地中にどんな生物がいてということを感じながら、地球を感じるような、１棟貸し切り型のサウナホテル。
- 世界的なラグジュアリーホテル「アマン」に学び、アマンを超えるような、日本の豪農の館を模して快適な宿泊施設を現在つくろうとしている。海外から一目置かれるような、そういったヴィラを作りたい。
- 公民館ホテルについて、これは実際に立山町にあるすごく大きな公民館のホテルだが、ここの地元の建設会社及びこのホテルを運営している方と新しい会社をつくって、地域の方が24時間使えるカフェがチェックイン機能を担っており、地域の人たちが普通にコーヒーとかハーブティーとかお菓子を食べているところに旅人がチェックインしてきて、「どこかこの辺、いいところありませんか」とか、「どこに行くとおいしいものが食べられますか」みたいな会話が生まれるようなホテルを計画している。
- この村は終わりがないわけで、常に未完成、逆に言うと常に発展していく村を作ろうとしている。20年後、僕が60歳になるときのヘルジアン・ウッドのビジョンは、旅人が住人になるような場所、すなわち泊まる、そして滞在するというもの。
- 最近は多拠点生活というのが当たり前になってしまった。僕も今、長野県の松本に自分の住む拠点をつくって、多拠点を実践してみようとしている。多拠点をやったことがない人が多拠点居住を呼びかけるのは全然説得力がないと思うので、まず自分が体験しようとしている。
- 滞在する、ここで暮らすような場所、すなわち子供や若者、次世代が集まって、営みや文化が受け継がれるような場所。必ず休校になった学校を面白い学校として復活さ

せようとしているが、それはリゾートじゃなくて、富山に世界に誇れる村をつくるんだという意気込みで今進めている。

２－② 意見交換

【土肥委員】

- 私は、富山県内を中心に、未就学児の小さなお子さんを育てているママたちに情報発信をしたり居場所づくりをしようということでいろいろな事業をやっている。私たちの特徴の一つは、情報発信をするだけではなくて、本当に顔と顔を合わせた状態でママたちから声が届くということで、自分の中では富山県の中で一番ママの声を聞いていると感じている。
- コロナ禍で私たちがやっているママ会とかイベントみたいなものは、かなり数は減ったが、それでも昨年だけでも多分100くらいは、いろんなイベント、オンラインも含め、させていただき、リアルな声をたくさんいただいた。
- 今、移住の話とかもあった中で、私自身、富山県の移住促進の事業も過去３年ぐらい少しだけ関わっていたが、子育て世代の方が富山県に興味を持つときのポイントの一つとして、待機児童の話は必ず質問として挙がる。
- 富山県自体は、待機児童は一応ゼロだということになっているが、実際、保育園にこれから入れたいと思っているママたちからは、希望していた園に入れなかったとか、待機児童ゼロだと思っていたので、第１希望だけ書いて出したら落ちちゃったみたいな話が少なくなくて、今月だけでももう３人ぐらいから、こういうときはどうしたらよいのかという問合せが来たりとか、いろんな企業の代表の方からも、うちの社員が保育園落ちたけれど、最近どうなっているのみたいな連絡が来たりとかしている。
- そうはいっても、保育園自体は、入れるところもあれば入れないところもあるということで、全部をならせばゼロなのだと思うが、以前から、どうして保育園の空き状況を開示してもらえないのかというのがずっと疑問だった。
- 例えば私が住んでいるエリア、前田さんも近所だが、子育て世代がとても多いエリアに住んでいて、とある保育園２つ、かなり大きな園があるのだが、片方の園が今年、年少さん以上のお子さんの募集を一切しなかった。ただ、その情報は、その園に通っている保護者の方は知っているけれど、一般の人は知らない。そうなると、そこの園はたまたま病児保育もあって、夜８時まで預かってくれるという好条件だったので、そこに入れたいと思う保護者は当然たくさんいたのだが、そもそも募集をしていない、だけど知らないので、そこに応募して落ちたというのがあった。逆に、ゼロ歳児は大量に募集していて、いつもあそこの園は落ちるって聞いているから申し込まなかった、空い

ているのにそこにわざと申し込まなかった保護者がたくさん出たという不思議な現象が起きた。

- 隠したいわけではないと思うが、今これだけ園児がいて、これだけ埋まっていて、来年の春にはこれぐらい余力が出そうだよとか、少し情報を出してくれれば、じゃ、ここの園と、第２はここにしよう、第３はここにしようって、ある程度計画を立てられるのではないか。
- 移住促進をするときに、待機児童ゼロという富山県、全国的にも待機児童ゼロの県がまだ少ないので、都会から来る方にとってはすごく魅力的に映るのだけれど、実際現地にいる私たちは待機児童ゼロだと思っていないので、損をしているというか、今は情報社会なので、富山のママたちが次々と保育園に落ちましたって言い出したら、富山は実は待機児童ゼロじゃないというのがすぐ広まってしまうので、まだゼロのうちにきちんと情報を出して、効率よく保育園に入れるような体制をつくれないものかと感じている。
- 富山市内は、共働きで正社員でも保育園に落ちたという人が１人、２人とかではなくて、正社員だったのに育休明けられないみたいな声も届くようになってきている。それもこれも第１希望しか出してない人も結構いるので、そうじゃなくて、第２希望、第３希望まで出さないと保育園は入れないかもしれない。でも、ここの園だったら大丈夫そうだみたいな確率をちゃんと示せたら、別にデータを出すだけのことなので、入れないところに申し込んでも無駄なので、何か効率よくできないものかと思っている。
- 保育園問題はママたちからの声が本当に多くて、もう一点あるのが、保育園に入れるときはポイント、点数制なのだが、就労時間の点数については、共働きの場合、就労時間が少ないほうの点数がその家庭の点数になる。奥さんがパート勤務で、旦那さんががっつり残業で働いていても、奥さんが８点だったら８点のほうを採用されるというルールだと聞いている。
- だけれど、普通そんなルールがあることってなかなか知ることがなくて、出してみて初めて自分に点数がついて、不承諾通知というのが届く。せっかく社会復帰しようと思っているのに不承諾通知が届くショックは結構大きい。市のホームページとかを見たら、ちょっと難しい言葉で、こういうのは何点、こういうのは何点って開示はされているけれど、そこまで見に行く人は実際なかなかいないので、その辺についても、例えば保育園に入れる半年前ぐらいになったら、一体自分は何点ぐらいなのか、簡単にセ

ルフチェックができたらよいのではないか。

- 他には、１人目の子供を第１希望じゃないところに入れた。でも、本当は近くの園に移したいと思ったときに、移す申請をするときは、引っ越しじゃない理由での転所希望はマイナス３点みたいなルールとかもあって、もちろん、満遍なくするためには仕方がないのだと思うが、そういう複雑なところも、もうちょっと何かシンプルな方法がないのかなと。
- 就活と保育を探す保活というのを同時にやるのはかなり難しいのだが、就活中で保活をする人は３ポイントしかないので、働いている人に絶対勝てないみたいなところもある。今、保育園になかなか預けられない人も増えている中で、社会復帰したくてもなかなかできない人がたくさんいるというところを、何とか解決できないか。皆さんからいろんな意見をいただけたらと思っている。
- 解決方法が出てきたら、働きたいとか、子育て以外の自分の居場所を求めたいと思っている女性がどこかに頼れる、保育園とか、そういった施設に頼ることができる富山県みたいなのがつくっていけたら、本当に地方の中で、女性活躍とか、そういったところが、きらっと光るようなまちになるのではないかと最近とても感じている。

【藤井委員】

- 今おっしゃったような、富山の現場における子育ての様々な行政上の不都合というのはあると思う。解決すべきことが多々あって、それは一つ一つやっていかないといけない。これはそういう、子育て日本一の県にするというところがあるので、一つ一つこれから事務局のほうでいろいろな関係者にヒアリングをかけて論点を潰してやっていくと。
- その際に重要なのが、今、情報公開できないかというお話があったが、オープンガバメント、行政サービスのデジタル化というところになってくると思う。これも知事のマニフェストに入っているところなので、福祉、教育、子育て、そういったところに関して、富山が全国でナンバーワンになるためにどれだけデータを活用できるか、オープンガバメントができるか、今後の検討課題として研究していけたらと思う。
- それが先ほどの前田さんや藻谷さんの富山に人を引きつけようという話にもつながってくるのだと思うが、恐らくその際のキーワードというのがウェルビーイングだと思う。今、東京の企業で東京から逃げ出したい人、私なんかもそうなのだが、ウェルビー

イングという言葉が非常にキーワードとなっている。

- これは、単なる福利厚生ではなくて、人々が職場環境だとか、家庭環境だとか、職場の人間関係だとか、仕事の働き方、そういうのを全部含めて非常に幸福な、ハッピーな状態が持続している状況をどうつくれるか。「くすりの富山」と言うと、ともすると製薬やヘルスケアのみのほうに行きがちだが、まさに前田さんの提案していることがウェルビーイングだと思う。前田さんがおっしゃっているようなまちづくりと、今おっしゃった子育て環境づくりをデータでつなぐというのが、ウェルビーイングをデジタルでどう実現していくかと、そういうピラミッド構造の論点分岐になっていくのではないかと思っている。
- そういう感じでこれから戦略をつくっていって、個別の論点はヒアリングして落としていく、全体コンセプトは全体コンセプトとしてつくっていくというそんな感じだと思う。全体コンセプトとして、私が本件に関して思っているのは、ウェルビーイング立県にする、それを富山で実現するということ。そのための観光も自然資源も文化資源も十分あると思うので、これは絶対できるし、応援したいと。

【高木委員】

- 18年間、新湊で生まれ育ち、今、東京でニューピースという会社をやっている。ニューピースという会社では、主にスタートアップを中心にいろんな企業のビジョンをつくって、それを広げるということをやって、僕自身クリエーターだが、それを映像だったりとか、あらゆる表現を使って発信していったりということをなりわいにしている。
- 今の議論を聞いて、藤井さんのウェルビーイング立県になっていくというのは全然異論なく、その方向だろうなと思いつつ、一方で、結論だけで言うと、結構どこも同じになってしまいそうだとも思っている。
- 僕は今のお話が全部つながっているなと思ったのは、さっき前田さんが旅する人が暮らす人になっていくということをおっしゃられたと思うが、僕はそれがすごく重要だと思っていて、例えば、僕は今33歳で子供が３人いるけれど、今からすぐに移住するかって言われたら、すぐにはしない。ただ、藻谷さんがおっしゃられたように移住は全然検討していて、やっぱり「移住」という言葉がよくないと思う。移動の「移」と「住む」が直結していて、移動して住むか住まないかみたいな。地方側は、住むこと、定住することをすごく求めるというか。

- でも、本当は移動して滞在して宿泊して、仮住まいしたりとかしてから、定住したりすると思う。僕自身、ADDressという全国の古民家を改装して、月額で住み放題みたいなサービスもプロデュースしたりしているのだが、そういうグラデーションをつなぐようなサービスが、それはさっきのヘルジアン・ウッドもそうだと思うけれど、増えていくと思うし、コロナによってリモートワークでますますそういう環境が整っていくと思う。
- 最終的にはウェルビーイングになっていくということなのだが、藻谷さんがおっしゃられたように、移住戦国時代においては、実はそのプロセスの形成がめちゃくちゃ大事だと思っていて、例えば、「なめらかな移住」みたいなことをいかに実現できるかが、都市圏の人材とか、特に状況変化の激しい環境で生きている人たちとの接点をつくっていくものになるのかなと思っている。
- 子育ての話が最初に来るよりは、最初はまず観光的な魅力がないと、そもそも来ないと僕は思うので、ある種の移住というものをガチッとやってしまうよりは、最初の移動するモチベーションをつくるところから、宿泊し、いかに接点をつくって、最後はどうやって定住していくか、そのときには暮らすということを考えると思うのだけれど、それを例えば４つとか５つのステップがあって、滑らかな移住をどうやって実現していくのかみたいなことを考えていけると、すごく今の時代に合ったやり方が実現できるのではないかと思う。

【前田委員】

- なめらかな移住とか移住に対するプロセス、ある種プロセスをしっかりデザイニングしていくとかブランディングしていくということだと思うのだが、非常に大事な観点だと思う。

【藻谷委員】

- 婚活みたいですよね。「住み活」とか、何かもうちょっといい言葉があるとよいのだけど。富山県の住み活、移住活、「何とか活」として、都会と富山を行ったり来たりしながら、ただ単に観光するのではなくて住んでも見るという活動を広げてほしいです。「住み活」も婚活と同じで、うまくいかないかもしれないけど、まずはトライすることが大事。小さなお子さんがいる場合に、試しに休みに子供さんを連れてきて保育園に

ちょっと入れてみたらこうだった、みたいなところから始める手もあります。住み活のメニューを提供できるぐらいの定員の余裕が保育園にあると良いのですが。

- もしかすると、島根県辺りの、保育園に余裕があるところだと、先行して試しに都会の親子が一時的に住んで子供が通うということをやっているかもしれない。富山の場合も、一時帰国の出身者の娘さんとか息子さんが、夏の間だけでも公立校に通うというのは常にやっているはずで、しかも結構一時帰国者の評判はいいはず。まさに婚活に並ぶような言葉として「住み活」を富山県で生み出せればよいのかなと思います。

【中村委員】

- 子育ての話は、まさに私は高岡市で子供をゼロ歳から保育所に預けさせていただいて、すごく助かったのだが、そこから１歳のときに大阪に移って全然預けられなくなった。民間の、結構値段も高くて、あんまりちゃんと預かってくれないところに行って、子供が毎日行くのを嫌がって泣いたような経験もしてきた。
- 先ほどのお話の中ですごくびっくりしたのは、待機児童ゼロというのをお聞きして、これ、全然私も知らなかった。いきなり住むのはハードルが高いというお話も当然ありだと思っていて、緩やかな移住というのもあると思うのだが、待機児童ゼロというのはすばらしいことだと思うので、その辺をまずしっかり告知していくというのはすごく大事だと思う。
- その辺を告知していきながら、富山はそういうところなんだよという意識づけをしていって、将来の受入れに備えながら、実際に情報開示の動きだとか仕組み化というのを進めつつ、富山というのは児童をきちんと受け入れてくれる県だよということをだんだん盛り上げていくことができれば、そのマイルストーンが１年か２年でつながっていけば非常にいいイメージにもなっていくし、そこで働きたいお母さんもすごく増えると思う。
- 特に、私は今、東京なのだけれど、やっぱり子供を預けられないので移転したという社員も非常にたくさんいる。地方への移転が叫ばれている中で、これはすごく受け入れるチャンスでもあると思うので、ぜひ考えていけたらいいと思う。

【吉田副座長】

- 先ほどの藻谷さんのプレゼンの中でも、富山の良さをさらに伸ばして自慢せよという

話があったので、待機児童ゼロについては、そういう意味で良さだと思うので、中村さんがおっしゃるように、発信していくということは重要だし、一方で、また藻谷さんがおっしゃっていたように、地域のことをちゃんと見るというか、行政上の不都合があれば一つ一つ解消していくべきではないかという藤井さんの話にもあるような、弱点みたいなものはきちんと克服していくと、これも藻谷さんのほうでおっしゃっていましたけど、それを逆に売りにしていくということだと私は理解させていただいた。

- ただ、そのためには、いわゆるビジョンというか、こういったところに向かっていこうねという方向感、方向性があって、それに向けて現実とのギャップ、課題みたいなものを克服していくというところのビジョンの共有みたいなものがすごく重要かなと思う。
- 高木さんのほうでビジョニングという概念を提唱されていらっしゃるが、その概念の簡単な御説明と、あと、富山でそれをどう展開していけばいいかみたいなところで、もし何か今日お話しいただけるところがあればお願いしたい。

【高木委員】

- 「ビジョニング」というのは造語で、一般的に価値を上げる情報発信のことをブランディングと言うのだと思うが、ブランドというのは過去の実績の蓄積だと思っていて、その歴史がブランドになると。絶対重要なものだけれど、それだけでは通用しない時代だとも思っていて、それは社会の状況がコロナとかで変化していったりとか、全体が変わっていく中で、そういう世の中の変化を先取って、こういう社会にしていくということを宣言していくことで、いろんな人たちを共感させたり参加させたりするということがすごく重要だなと思っていて、それをあえて過去の、自分たちはこういうブランドです、資産があります、皇室御用達だとか100万人が何とかという、そういうような一方的な語り口よりは、こういう社会をつくろうということを呼びかけていって仲間を集めていくような、ビジョンを中心としたコミュニケーションをやっていくことで新しいブランドをつくっていけないかということを言っている。
- それは主にスタートアップの戦い方だが、まちづくりでも関係あるのかなと思っていて、まちを選ぶというのは、主にブランドを選ぶということに結構近いものなのかなと思っている。例えば、一番ブランドが分かりやすくて強いまちというのは京都とかだと思うが、歴史的な資産があって、ある意味で時代関係なく蓄積されたアセットがある。ある意味、金沢とかもそういう強さがある。

- 一方で、都市でいっても、例えば福岡はもちろん歴史とかもありつつ、でもアジアの国際都市になっていくとか、スタートアップを集めるということを掲げていくことによって、移住者、サテライトオフィスを集めたりとか若い人を集めたりしていて、それって全然違う戦い方だと思う。
- 田舎でも、例えば徳島の神山町も、アセットベースで言うと、そんなに戦えないかもしれないけれども、逆に自然の中でITというような「創造的過疎」と掲げてやっていくことで、すごく集まってきて、今はさらに、さっき学校の話があったが、Sansanという名刺管理のサービスをやられている創業者の寺田さんが神山まるごと高専というのをつくられることを発表していて、それのディスカッションとかにも参加させてもらっているのだが、そういうような取組が生まれていくと。
- 僕はその両輪を回すことがすごく大事だと思っていて、県の発信とかブランドをつくるとなったときに、富山でいうと、大体白エビとかホタルイカとか立山みたいなものになりがちで、それを発信するだけじゃ駄目だなって思っている。もちろんそれはベースにありながらも、こういうアセットを使ってどういうライフスタイルを提案していったり社会をつくっていくかという両輪を回すのが重要になっていくと思っているので、そこのビジョンを起点に世の中に呼びかけていく、問いかけていくようなコミュニケーションが今回できると、東京とか大阪とか、そういう都市部から見たときの選択肢に入るのかなと。でないと、移住って、東京の感覚だと、多分鎌倉とか軽井沢とかを選んでしまうと思うので、そこは違う選択肢を出していく必要があるかなと思っている。

【吉田副座長】

- ビジョンニングの考え方を聞いていて、まさに前田さんのヘルジアン・ウッドの取組というものが結構近しい、要はビジョンみたいなのを掲げて、それに賛同者が徐々に集まってくるような、そういった展開があったのではないかと思うのだが、やはり当初はそれをセンスメーキングというか、納得してもらうとか、そういう仲間つくるというところが結構大変だったのではないかと思う。
- 今後、こういうビジョンの議論を深めていく上で、今ヘルジアン・ウッドの取組において、最初の頃の実態はどうだったのか。それが、どういうところでいろんな人が仲間になったかとか、その辺、高木さんの話を踏まえてどのようにお感じになったか、お伺い

したい。

【前田委員】

- 先ほど、新規の事業をやるときに、僕は６つのパラメーターを使って考えると言ったのだが、そのときにすごく大事な要素は、まず地域の方々の、ある種の腹落ちとか納得性があることで、先ほど僕が冒頭話したとおり、地域の方は地域の財産とか宝とか光に気づいていないので、外部の目線というのが非常に大事で、たまたま僕がやったヘルジアン・ウッドの土地の地域の方々が、外部とか僕みたいなよそ者とか、シェフも移住者だし、農業をやっているのは沖縄の移住者だし、ヘルジアン・ウッドのデザインとか、あれを全部やってくれたのはナミエさんという東京からの移住者だし、大体、外部の血が半分、地元、ローカルの人半分という形で、すごくいいハイブリッドで、いいレイヤーで仲間が増えていっている。
- だから、無理してバズらせようともしていないし、広告なんか、１個もお金使ったことないし、本当にこの価値とか光を分かち合えるような人たちがゆっくり仲間をつくっていこうというビジョンがあったので、富山の忘れ去られていたとか、地元の人すら気づいていない、先ほどホタルイカとか白エビの話が出たけれど、そこじゃなくて、もっともっと自分の足元とか、周囲半径何メートルにあるよねというところに気づくという文化、カルチャーをつくろうというのがヘルジアン・ウッドだし、その価値を分かる人がちゃんと集まってくれば価格競争にならないというのは、ちゃんと狙いどおり進んでいるかなと思う。
- それと、先ほどの藻谷さんの話プラスアルファ、聞いていてちょっと思ったことがあって、富山を自慢しましょうと藻谷さんがおっしゃった。富山の人ってとことん自慢しないじゃないですか、奥ゆかしいというか。自慢するとたたかれるみたいなこともあったりして、あまり自慢しない人が多いと思うのだが、これは逆で、どんどん埋没するので、ちゃんと自慢しなきゃいけないと思っている。
- 僕もヘルジアン・ウッドに県外の人が来たら、がんがん富山の自慢をして、絶対富山は楽しいですよ、住んだほうがいいですよ、こんなにすばらしいですよって、がんがん自慢するのだが、もっともっとしたほうがいいと思う。そんなときに、さっき婚活じゃなくて住活とか、移住活という話も出たけれど、みんなで富山の自慢を集めようみたいなプロジェクトがあってもいいと思う。富山県民一人一人の、自分たちのまちの自慢

を集めてみるみたいな、それで、ぐちゃぐちゃになっちゃうのでちゃんと再編集するということが大事かなと思っている。

- 思い返してみると、博多と鹿児島に九州新幹線ができて、熊本がやばいぞといったときに、熊本知事が小山薫堂さんに声をかけて、埋没しないように、熊本のいいところをどんどん県民として見つけようと、そのアイコンをつくってほしいということで最初オファーがあって。「くまモン」も小山薫堂さんが生み出されたが、くまモンがあって何かじゃなくて、地元の人たち、タクシーの運転手、地元のおばちゃんたちに、熊本を自分たちとしてもう一回考えたときに、熊本の人が驚くような自慢は何かなというのをぽこぽこ熊本の地図に貼りつけていって、くまモンって驚いた顔をしているのだけれど、地元の人も驚くような場所に対する１つのアイコンとして、くまモンが生まれたということを今思い出した。
- ゆるキャラは別につくらなくてよいのだが、富山にも何か地元の人たちが自慢できるようなものを集めてアイコン化し、それを１つのロゴマークでも何でもいいけれど形にすると、一体感というかワンチームになれるような気もする。自慢下手な県民だと思うので。

【中尾座長】

- 例えば、いつも反対しているのだけれど、一般にもよく言われているが、豊かさ１番なんだと。何でですかと聞いたら、持ち家率が１番だと。１人当たり住宅面積が１番だと。それってそんなに豊かなのかなと。私は高校進学率も極めて低い、貧しい魚津の山奥の出身だが、江戸時代よりずっと前から持ち家率が100％だと。１人当たり住宅面積２００坪ぐらい。そういう数量的な豊かさは比較されていっぱい出ているけれど、もうちょっと定性的なものを数量化して比較する、数量化理論というのがあるけれど、例えばさっきおっしゃった景色であってもいい。もっとそういうものを自慢していけばよいのだと。
- それでいて、我々の世代は結構よそ者扱いがまだ残っている。皆さん、若い人はもうないでしょうけれども、そういう意識の変革が、今度、我々は改めていく、そういう運動をしていかないといけない。
- また、畑とか、郊外の問題、私も魚津の山奥の家を呉羽へ持ってきて、交流館に使ってもらっている。近くにサラリーマン農場もある。ロシアでもドイツでも六、七割、サラ

リーマンは自分の野菜を作っていると聞いたことがある。子供たちと一緒に畑で働くような体験。呉羽の交流館の周辺にも住宅が建ってきたが、そういう中で、そういう生き方、生活の仕方。そういうことも自慢になる。

- その他、教育環境がいいので、転勤になったらお子さんと奥さんを置いていくと、そういう事例は私も幾つも知っているので、教育にこれからもっと力を入れていっていただくということも大切だと。

【高木委員】

- すごく個人的な話になるが、18歳で富山を出たとき、本当にいち早く富山を出たかった。出たくて出たくて、出ること自体が受験の目的ぐらいの感じで出ていって、正直、正月とかお盆ぐらいしか帰っていなかった。
- ただ、最近、ヘルジア・ンウッドさんはまだ完成していないけれど、例えば氷見のSAYS FARMさんとか、井波のベッド・アンド・クラフトさんという、まちをホテルにしようとか、レヴォさんとか、桝田酒造さんがやられている岩瀬のまちづくりとか、そういうところに、最初は富山の友人がきっかけで連れていかれて、こんなところが富山にあったんだと。それはもちろん、建や食のクオリティーがすばらしいというのもあるけれど、それを通じて改めて富山の環境とか自然とか、暮らしみたいなものをもう一回フィルターを通してみると、すごく豊かだなと気づかされた。
- それから、僕は定期的に、東京の見てほしいなという友達を連れてツアーをしているけれども、本当にみんな驚く。これがラグジュアリーだねという感じで。それってなかなか中にいて気づけなかったし、僕の父母は今も富山に住んでいるけれども、「ああ、何か聞いたことあるな」くらいなので、正直もったいないなと思っている。
- もちろん、今言ったところは結構お金もするところで、ある意味観光のフックにはなるけれど一般の人と関係ないと思われるかもしれない。だけど、そういう職があるから１次産業の価値も上がったりとか、またはそこに使われる高岡の伝統の器があったりとか、やっぱり連鎖していくものだと思う。最終的にはそこの自然環境が好きでそこで暮らしたりだとか。
- 僕は、さっきのホタルイカとかもめちゃくちゃすばらしいと思うけれど、自慢できるものが、今、富山の中にめちゃくちゃ新しく生まれているということにもう一回気づいたほうがよいと思っていて、それをもう一回、外の目で編集し直して発信するとい

うのは本当に大事だと思う。

- 例えば、ミシュランも、金沢に三つ星がなくて富山に三つ星があるという事実もすごいことだと思う。何かそういう富山の魅力をもう一回編集し直して出す、それは最初のきっかけづくりかもしれないけれども、本当に自慢できるものがあるんだというのは、僕の肌感としてもすごく思うし、東京の感度の高い友達を連れていっても、確実にみんなファンになるので、それは本当にあるのだということを言っておきたい。

【藤井委員】

- まさにおっしゃるとおりだと思っていて、私は富山とは血縁関係がなくて、最初、私も東京出身なので、どこか田舎が欲しいなと思って、応援する自治体を探そうと思って日本地図を広げて見ていったときに、自然環境が豊かで、いろいろな面白い企業があって、なおかつ、富山が面白いなと思ったのは、歴史的、地理的にあまり恵まれているわけじゃないですよね。新潟と加賀、前田に挟まれて、別に土地が肥えているわけでもないのに、その中で一生懸命薬を売って頑張ってきたという、新しいものが生まれる、それで北陸工業地域の中心的地位を担っているという、その辺の新しさ、コンビネーションがすごく面白い。コンパクトシティをやっていたりとか。
- 富山にどっぷりつかっている人からすると、富山って後れているし、早く出たいみたいなのがあるのかもしれないけれど、東京から見ると、結構先進地域に見えなくもないというか、見える可能性があるポテンシャルがある。
- 京都、金沢みたいな、歴史的にものすごい遺産があるわけじゃないじゃないですか。瑞龍寺がありますとか、それぐらいで、これを見るために富山にどうしても行かねばみたいな、そういういわゆる観光地ではないと思う。だからこそ、さっきおっしゃったSAYS　FARMとか六角堂だとか、あとHOUSEHOLDだとか、そういうのが出てきていて、新しいタイプの個人型ハイエンド観光というのがどんどん出てきているのではないかと思う。だから、そこはすごく大切にして育てないといけなくて、そこにこそポテンシャルがあるのだと思う。
- とはいいつつ、さっき言った先進地域、先進都市としての富山の可能性というのも捨てたくないなと思っている部分がある。例えば、私は前職がグーグルだったけれど、鯖江とか武雄とかにすごくみんな行っている。スタートアップ企業はみんな鯖江に行くし、東京で会えない人に鯖江で会う。データサイエンス関係者とか、鯖江で飲んでいる

みたいな、東京でも会わない人たちがどうしてここにいる、みたいな。あそこはオープンデータでデータシティ鯖江というのを掲げたりとか、あと武雄も、いろいろ批判はあったかもしれないけれども、新しい行政というのをやって、そこをみんな知りたくて武雄に集まったというのがあったと思う。

- 実際に行ってみると、鯖江も武雄も観光地的なものは何にもない。だけれども、何か新しいことやっていて、先進的なものが行われている。だから、富山でいうとコンパクトシティもそうかもしれないし、あと富山型デイサービスみたいな、様々な斬新さというのは富山にあると思っていて、だから、そこは新しい知事の体制の下で、どんどん加速できる部分だと思う。
- イメージでいうと、ポートランドというのも出ているけれど、ほかには例えばミネアポリスとか。ミネアポリスも、別に観光地として何があるってわけでもない町だけれど、なぜかすごく政策が先進的でヒップなまちだというふうに認識されていて、たまたま精密医療機器だとかヘルスケア産業も集積していたりしている。
- まちの動かし方が新しいから新しいと認識されて、それで東京でつまらないと思っている若者が、地方で新しいことやっているまちがあるらしいぞみたいな、鯖江とか会津若松とかもそうなのかもしれないけど、ミネアポリス、ポートランド、そういう斬新さというのも目指せないかなと思っている。

【中村委員】

- 今までの議論を聞かせていただいて、富山の魅力ってすごくたくさんあるなというのは皆さんも感じていらっしゃると思うし、特に県内の方よりも、外から見て、ああ、これ、すごいなというのがすごくあると思うのだけれども、それを発信し切れていないのだと思っている。
- いいところを全部発信していって、どんどん自慢しましょうというのもあると思うのだけれども、それって、以前、私、新幹線の開業の前の協議会か何かに呼ばれていったときに、100人ぐらいの人が参加されて自己紹介で終わって、何の会議なのかとちょっとびっくりしたことがあって、今回10人ぐらいということなので参加させていただいた。
- 各部署とか人が広がると、言いたいこととかやりたいことはいっぱい広がるのだけれども、これが散漫になってしまうと効果が出なくなってしまうと思うので、この議論

を重ねていく上で、富山の魅力の中で、何が一番ほかとの差別化ができるのか、どんな戦略がいいのかというところをまず立てていただいて、全部網羅というのは残念ながら無理だと思うので、ぜひ優先順位をつけて、何を主にやっていくのかというのを戦略的に決めていただいて、それを１つずつ落とし込んでいって、この部分だと、絶対ほかの都道府県に負けないよというところをつくり上げていくというのが、今回すごく重要なテーマなのではないかなと思っている。

【藻谷委員】

- 富山県のことを、男はたいていが「魅力的だ」と褒めるのだけれど、女性はどうなのでしょうか。さっきすごく引っかかっていたのが、コロナで県内の女性の自殺が増えたという話です。全国的にもそうだと言われていますが、富山は特に多かったとするなら問題です。
- さきほども子育て世代回帰指数は95ですとご説明しましたが、その数字を午前中に富山の人に見せたところ、早速言われたのは、「男女別に見ればどうだろう。女性はそんなに帰ってきてないでしょう」。女性から見た魅力をきちんとつくらないと、男が「いい、いい」と言っていても男の遊び場になってしまうだけで、活性化にはなりません。
- 私はさっきの前田さんのプロジェクトにたいへんな魅力を感じました。若い女性もそう感じるのではないかと思うのですが、逆に言えばそこまでの魅力がこれまでの県内には乏しかったかもしれません。何かそのあたりについて県内の問題点を、誰か突っ込んで言っていただければと。

【土肥委員】

- 今、皆さんの話を聞きながら、ああ、そうだよね、富山はあれもこれも実は魅力なんだよねというふうに感じていた。私は自分のフィルターが子育て世代というところから切り離して考えることができないので、そういった目線から言うと、先ほど例に挙がったヘルジアン・ウッドもそうだし、例えば岩瀬とかも最近本当に盛り上がっているなと思うのだけれども、そこに子供を連れていくかどうかというのが結構悩ましいところで、私、前田さんからはヘルジアン・ウッドの計画の話は以前にも聞いたことがあって、行きたい、行きたいとは思っているけれども、子供をそこに連れていって、子供は楽しいのかなとかがなかなか分からなかったりとか、岩瀬の今盛り上がっていると

ころも、例えばクラフトビールがとか、高級なおいしい食事処があって、実は私、去年の年末に岩瀬にこっそりと１泊してきたのだけれども、どこかで御飯を食べようと思ったら、どこもコースで２万5,000円とかで、ここには子供を連れては行けないなというふうに思ってしまったところは正直あって、もうちょっと、あと10年ぐらいしたら、こういうところで楽しめるんだろうなというところは、正直感じているギャップとしてある。

- 女性が戻ってこない理由とそれがイコールになるわけではないけれども、すてきだなと思うところと、そこに自分は合致しない、そこがすごく遠いというか、日常的な日々の充実となかなか一致しない部分が、やや富山の中にはあるのかなと感じたりするところはある。
- 周りの、県外から富山に来ている子育て世代の方から、富山の魅力として一番よく聞くのは、公園がきれいだよねという話はよく挙がる。都会のほうの本当のおしゃれな公園を見てきた人からしたらそうじゃないかもしれないけれども、どこに住んでいても、それなりに楽しい、草ぼうぼうじゃない公園がそれなりに整っていて、同じぐらいの子供たちが遊んでいて、一休みしていたら周りのママと仲よくなれたとかというところがあるので、ぜひ富山の魅力を外へ発信していくときには、ふと身近にある公園が本当に人と人をつなぐいい機会になっていたりするので、公園の魅力もそこに１個乗せたいなと感じている。
- あと、これもあちこちで言っているのだけれど、城址公園が結構悲惨なことになっていて、私は町なかが好きで、バスに乗って子供とよく総曲輪のほうまで遊びに来たときに、娘が城址公園に行きたい、お城に行きたいと言うので行くのだけれど、あそこは今はもうブランコしかなくて、SLも長い滑り台も何もなくて、ブランコだけがぽつんとあるという状態になっているので、せっかくコンパクトシティで町なかに人が戻ってきているなら、公園の魅力というのをその中にも１つ入れられたらいいなというのも感じている。

【吉田副座長】

- SDGsの世界でも誰ひとり取り残さないということで、子育て世代から見た課題についてもちゃんと向き合っていくというか、先ほど藻谷さんからもあったが、弱点克服というものを富山の強みとしていくべきだと思うので、そのときには子育て世代の声も

ちゃんと拾っていくというか、そういった方向感をみんなで共有できればいいのかなと感じている。

- 私が思うのは、これからの地方都市のビジョンを考える上で、富山においては、できれば日本初の、それこそ斬新なプロジェクトを通じて、世界、日本に富山の魅力を発信して、それで県外の企業や人材を呼び込んでいくような、そういった攻めのスタイルみたいなものがあるといいのかなということで、今日そう思ってここにきたのだけれど、前田さんのヘルジアン・ウッドの話を聞いて、その意を強くした。
- そういったプロジェクトを通じて富山の価値が顕在化されて、それがさらに高まっていくような、そういったことを地域で繰り回していくと。その経験値、ノウハウの蓄積こそが強みになっていくのかなと思っている。これからのビジョンづくりを本格化させていく上では、そういった点も意識していければいいのかなと感じている。

【前田委員】

- 次回の宿題でよいのだが、以前の会議体でも発言したのだが、先ほどの女性がどうして出ていくかということはかなりクリティカルだと思っている。教育県として日本一、持ち家率ナンバーワン、貯蓄率もナンバーワン、共働き率――これがいいのか悪いのかは分からないけれど、働いたり住みよさがあるはずなのに、若い女性が出ていってしまう理由、戻ってこない理由は何かという本質的なところ、これだけ住みやすいのに女性が戻ってこないのは何かという根本的なものについては、僕もちょっと分からないのだけれど、これは学術的なデータとか、いろんなインタビューみたいな定性情報も含めてちゃんと取らないと、変な話、臭いものに蓋をしているような雰囲気がどうもあるじゃないかと思うので、若い女性が出ていって戻ってこない本質的な理由、これは何か議論できたほうがいいと思う。

【柿沢総合政策局長】

- 前田さんのおっしゃるとおり、もう少ししっかりと考えないといけないのだが、いろいろな方に聞いたところでは、まず女性にとって魅力的な働く場所がない。女性活躍でよく言われるのだけれど、男性と女性の固定的な役割分担意識が富山県は強い。そうした中で、自分の力を発揮する職場が自分は見つけられなかったという人もいた。
- 調査をしっかりとやったものではないので、これが一概にそうですよという結論づけ

はできないけれども、職場において女性の管理職比率が富山県はすごく低い。そうした点はなぜか、なぜかと言いながら、今までしっかりとした調査もやってこなかったので、それについては新年度予算で調査もやりたいと思っている。

【中村委員】

- 私は、東京、大阪をはじめ、全国の経営者の方々とお会いする機会がすごく多くて、富山においても、北日本新聞がされている「平成広徳塾」とかに出させていただいて、その講師の方で富山の経済人の方ともお会いするけれども、残念ながら非常に封建的で、富山の男性の方というのは、特にお年を召した方々は。中尾さんだけちょっと別ですが。
- 実際お会いして、中尾さんは本当に富山では珍しい方だなと思ったのだけれども、もしかしたら新田知事もそうなのかもしれないけれど、それ以外の方々は、非常に著名な方々も、やはり「女の人け」という感じで見られている。私も富山では、昔から言ういわゆる一般職でしか女性は働けないんだろうなと思って外に出たし、戻ってきてみても、年配の方というか、とても封建的なところは続いていて、そこがなかなか変わっていってないなというのがある。今回、知事が新しく代わられた機会に、ぜひそういうところを大きく変えていただきたいと思う。

【高木委員】

- 今のお話、本当に重要だと思っていて、僕もジェンダーとかに関しては、すごく古い価値観が残っている県だと思う。あと、子育てに関しても、僕も３人子供がいるので、公園とかはすごく重要だと思っている。
- 先ほど中村さんがおっしゃられたように、情報発信って、全部入れていくと結構複雑になってしまって、結局何も言ってないみたいになるので、僕が最初に言わせてもらったように、外から人を引っ張ってくる、観光に近い部分は、ある種の斬新さが必要で、そこの部分と暮らしの部分。暮らしって、そんなに別に斬新さが必要なわけじゃなくて、もっと暮らしやすかったりとか、ある種の格差がなかったりとか、そういうことが必要で、今までそれがばきっと分かれたのがコミュニケーションとしても問題で、だから移住につながっていかないというのがあったと思う。
- 僕はそれぞれをちゃんと明確に、例えば暮らしだったら待機児童とか、女性の働き口

とかの問題はめちゃくちゃ重要な論点だと思うし、一方で、観光とかだったら東京の人を引っ張ってこられるか、グローバルの人を引っ張ってこられるかというのはすごく大事な論点で、それをそれぞれで整理して、それをどうやってうまくつなげていくのかという考え方でできればいいのかなと。

- 最初から交ぜて議論すると、話がどっちにフォーカスしていいのかが分からなくなるので、その辺を整理しながら、最後どうやってそれをつなげていくかが最後の移住政策というか、人々が移動しまくる時代においての新しいまちづくりの在り方につながっていくのかなと思ったので、そういう整理ができるといいなと思っている。

【藤井委員】

- ラフな分類をすると、今日は主に１次産業と３次産業の話が多かったと思う。要するに、農業だとか、自然、文化と宿泊だとか住まいというところをどうしていくかという話が多かったと思うけれども、一方で、富山の経済成長を考えるときには、富山はさっき言ったように、北陸工業地域の中心であって、金属加工業だとか精密産業だとか、そういったものづくり立県でもある。だから、そこを今後どうしていくのかというのは、どこかでテーマにすべきだと思う。
- たくさんのいろんな中小企業があって、その辺がもしかしたら経営としてDX化できていないだかとか、もしくはいわゆる封建的な、家庭内工業的になっている部分があったりして、そこがアップデートできるのか、富山の第２次産業、工業をどうするのかというのを１つのテーマにしたいと思っている。
- その際に、それに絡むのが、富山でいわゆるスタートアップコミュニティーみたいなものをつくれるのかとか、新しい若手経営者をコミュニティー化できるのかみたいな、その辺につながっていくのかと思うので、テーマとして１つテーブルに置きたいと思っている。

○会議終了後に委員からいただいたご意見

【中尾座長】

- インテックの社長時代、呉羽で耕作者がいなくなった梨畑を借りて社員とその家族で農作業をしたことがある。業務に疲れてしまった社員がその専任になり、２、３年で回復したこともある。
- ずっと昔のことだが、日本開発銀行さんに依頼され、新潟県の田舎、青柳町の街づくり診断をやったことがある。多くの空き家を都会の人々に貸し、時には売り、その人たちが週末や夏休みに家族でやってきて野菜づくりをした。その地域はとても賑やかになった。
- 私は立山黒部ジオパークの会長をしているが、その目的のひとつに子どもたちが、立山黒部ジオパークについて学ぶことによって、ふるさとを大切に守り、住む、そしてふるさとへの愛を高めていくことを目指している。みんながふるさとを愛し、それを大切に思い、愛し、そして伝えていく、こんな地域が日本一ではないか。
- 今回のテーマは地方都市のビジョンだが、私は地方都市というよりも、ひとつの「富山」のなかのいくつかの都市、その郊外（周辺地域）を全体的に考えていく、トータル・ビジョン―富山のトータル・ビジョン（TTV）をみなで求めていきたいと思う。